◆第1回　乳牛を飼うための基本を考えよう

読者の皆さん、酪農のことを「楽な農業」としゃれる方がおられますが本当ですか？むしろ、楽ではない「ラクＮＯ」と答える方が正しいのではありませんか？

乳量は、４０年程前までは２０００㌔でしたが、今は平均８７００㌔と短期間に急激な伸びとなっております。

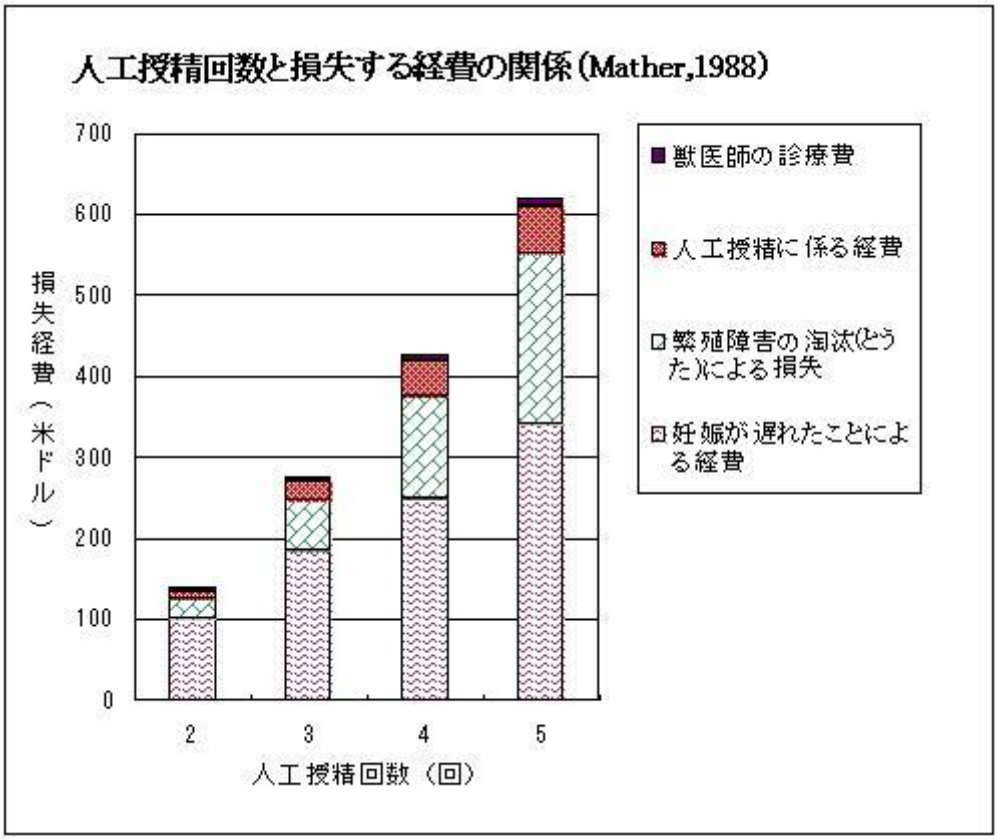
一方、生体である乳牛は多くの代謝病を含む疾患に苦しみ、獣医師はその火消しに追い回され、さらに酪農家は搾乳や飼料給与、糞尿処理と管理面での課題にも頭を痛めております。

日本では、乳牛のほとんどが凍結精液による人工授精が行なわれており、牛は、妊娠しなければ２１日前後で発情兆候が認められます。

しかし経営面から１年１産が目標となっており、机の上では多くても発情周期で３回以内に妊娠させることが必須となっております(牛の妊娠期間＝２９０日、生理的空胎期間＝４５日、残り４０日で人工授精により妊娠させる)。

なお、米国の農業経済学者ら(１９８６年)はミシガン州の２２の農場の３３０９頭の搾乳牛について必要経費を分析しております。

報告では、１回目の人工授精の経費を０米㌦とすると、３回目の人工授精時には２７９米㌦(当時の日本円換算で約８万円)を支払ったことになり、牛群改良の遅れや乳房炎を含む多くの疾患増の危険性などにより、帳簿に記載できない支払金額はさらに増えます(グラフを参照)。



乳量の増加、飼料給与の質と量の改善および遺伝的改良が行なわれた結果、酪農家には繁殖成績の向上のための基礎的知識の確認と、繁殖管理プログラムの確立が求められ、毎日一定の時間は牛群を観察し、その結果を記録する作業が求められております。

今後は読者の皆さん方とどんな事が繁殖成績の向上に係わるかについて考えてみましょう。

農業共済新聞　岩手版　2005 年 8 月 3 週号より